

第3章

景観形成における色彩について

- 1 色の基礎知識
- 2 素材と仕上げ
- 3 建物の色の基礎知識
- 4 色彩調和の基礎知識
- 5 色彩を活用した身近な景観づくり

第3章 景観形成における色彩について

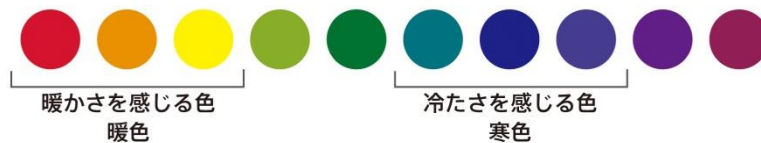
1 色の基礎知識

建物の色を考える前に、まずは色の基本的なことから学びましょう。

視覚情報は、五感の中で約8割の情報を占めるといわれており、私たちは多くの色に囲まれて生活し、色から様々な印象を受けています。ここでは、色を上手に使い、良好な景観を形成するための色の基礎知識について学んでみましょう。

(1) 暖色と寒色

色には暖かさや、冷たさを感じさせる効果があります。赤色、橙色、黄色は、暖かさを感じる暖色です。一方、水色、青色は、冷たさを感じる寒色です。



(2) 色の3属性

色相・明度・彩度の3つを、色の3属性といいます。これらの3つの性質によってすべての色进行分类したり表示したりすることができます。

●色相は色あい

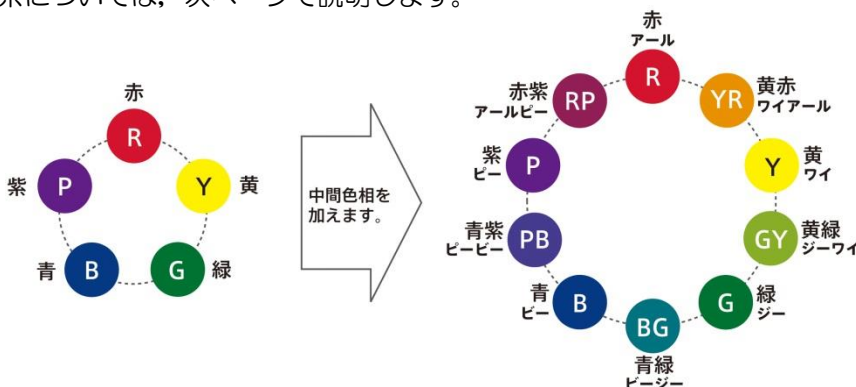
世の中にはたくさん色があります。



この色を色相の違いで大きく5つに分類すると・・・

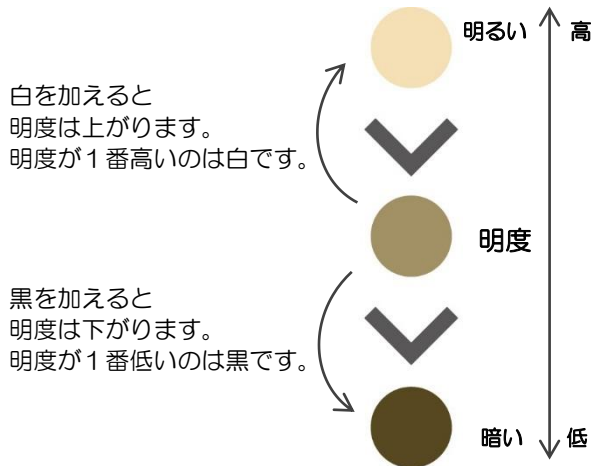


この5つの色相を基準に、中間色相を増やすと10色相になり、マンセル表色系のベースになります。マンセル表色系については、次ページで説明します。



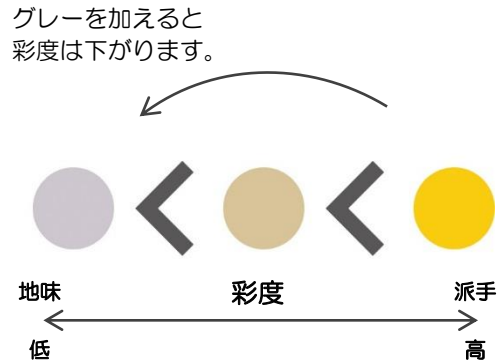
●明度は色の明るさ

明度は色の明るさと暗さのことです。



●彩度は色の鮮やかさ

彩度は派手・地味といった鮮やかさのことです。

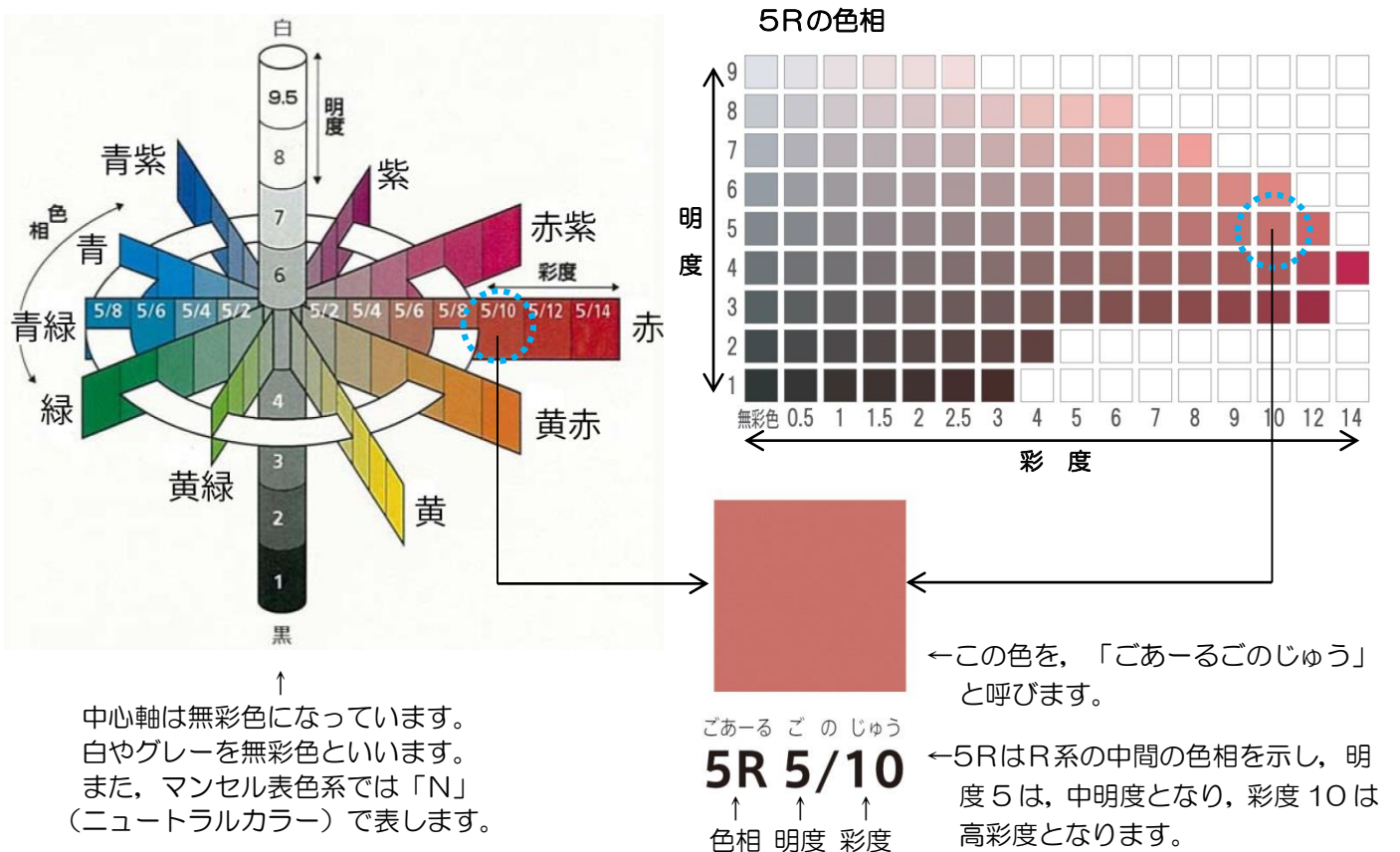


出典：色のえほん 視覚デザイン研究所

(3) マンセルシステム

色彩は色あい(色相), 明るさ(明度), 鮮やかさ(彩度)を正確に伝えるために数値・記号化されています。このガイドラインでは, アメリカ人美術教師のアルバード・マンセル氏が発案した「マンセル表色系」を用いています。

「赤」といっても, 人それぞれ, 色々な赤を思い浮かべます。同じ色を共有するために, マンセル表色系では色相は数値とアルファベットで, 明度・彩度は数値で3つの要素を表記します。

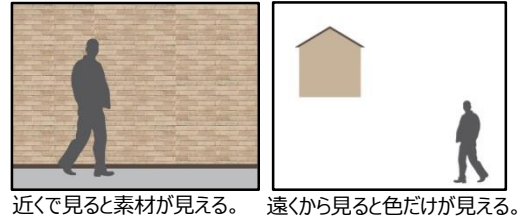


2 素材と仕上げ

（1）色と素材

同じ色であっても素材が異なると建物の印象が変わります。また、遠景からは同じ色に見えても、近くで見ると素材の違いから異なる印象の建物に感じることもあります。

特に、タイル・レンガ・石材などによる仕上げでは、表面の光沢や凹凸感など、素材のもつ風合い自体が、建物の表情を引き立てることもあり、色彩計画では、色だけでなく素材の選択も重要なポイントとなります。



◆コラム

●表情をつくる素材

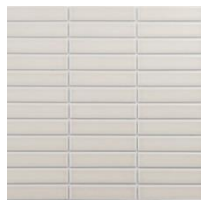
建物外壁に使用される素材は、様々なものがあり、素材によって建物の印象が変化します。外壁の一部にアクセントとして使用するだけでも、豊かな表情とすることができます。



石材
重厚で落ち着いた雰囲気になります。



レンガ
伝統的で端正な印象になります。



タイル
現代的で洗練された印象になります。



塗り壁
人の手のぬくもりを感じる温かな印象になります。



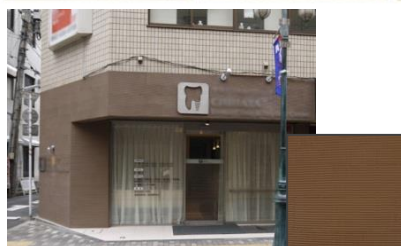
木材（木調素材）
自然環境になじみやすい印象になります。



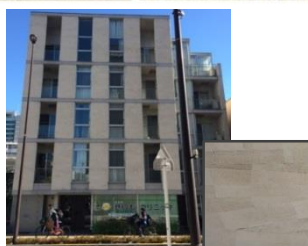
素材を工夫することにより、表情豊かな外観になります。

（2）色と仕上げ

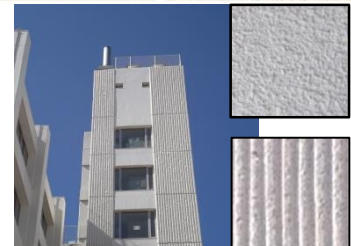
近年、塗装にも多様な仕上げが用意されており、仕上げ方法の選択により建物の印象も変化します。下の写真のように、同じ色でも、塗装表面が平滑面か粗面かによって、光による陰影の様子が変化し様々な表情の違いが出てきます。塗装仕上げも工夫次第で、様々な表情のある仕上げにすることも可能です。



櫛引仕上げは、自然な風合いに見えます。



コテ仕上げは、温かな雰囲気が見えます。



吹付仕上げの工夫により、光の陰影が、表情の違いを作ります。

3 建物の色の基礎知識

色の基礎知識を学んだところで、ここでは建物の色の基礎知識について学びましょう。

(1) 色の面積効果

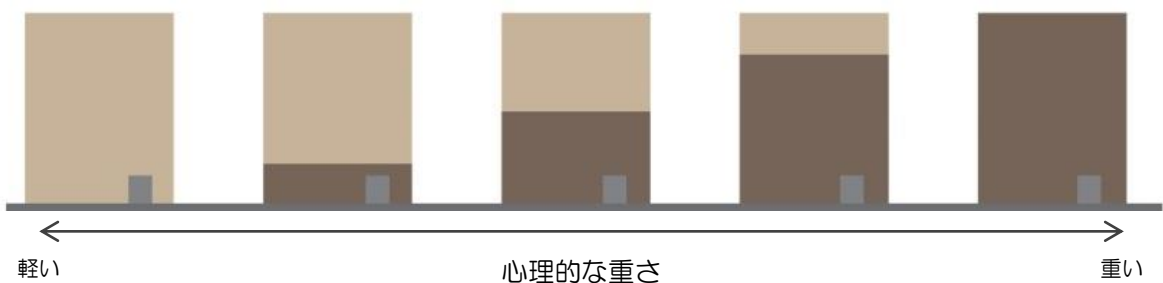
小さな色見本の確認だけで色を決める場合、大きな面積になったとき、明るさや色味に差が生じイメージが変化して見える現象を色の面積効果といいます。明るい色は、大きな面積になると、より明るい色に見え、暗い色は、大きな面積になると、より暗い色に見えます。

また、パステルカラーのような明るい有彩色は、彩度も増したように感じ、暗い有彩色は、彩度も低くなったように感じます。外壁の色を選択する際には、色の面積効果を十分に考慮しないと異なる印象の建物になることがありますので注意しましょう。



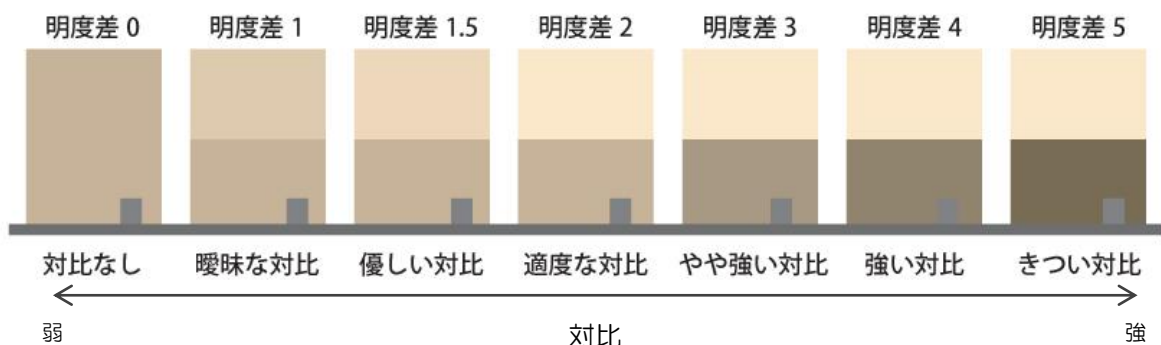
(2) 心理的な重さとイメージ

色には心理的な重さがあります。明るい色は軽く感じ、暗い色は重く感じます。軽快な建物にしたい場合は、明るい色を多くし、重厚感を持たせたい場合は、暗い色を多くします。また、複数の色を使用する場合は、低層部を暗い色にした方が、建物が安定して見えます。



(3) 明度差の対比効果

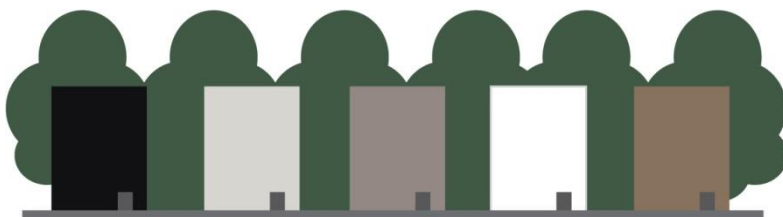
複数の色で配色をするときには、明度差の対比効果を意識しましょう。対比が弱いと、優しく繊細な配色になり、適度な対比では落ち着いた配色となります。また、対比が強いと力強い配色となります。



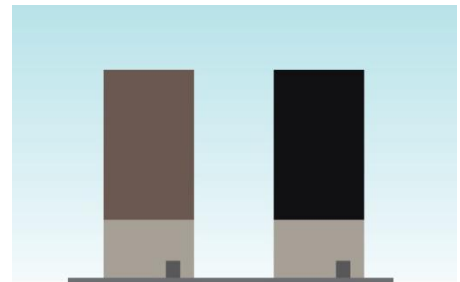
4 色彩調和の基礎知識

（1）周辺環境との調和

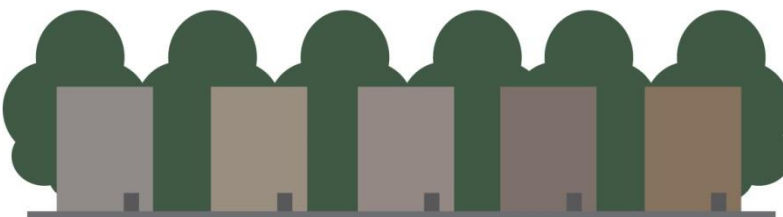
緑が背景となる場所で極端に明るい色の建物や、空が背景となる場所で極端に暗い色の建物は、背景よりも建物が目立ってしまいます。建物の背景がどのような場所なのかを十分に観察し、周辺景観と調和する色を選択しましょう。



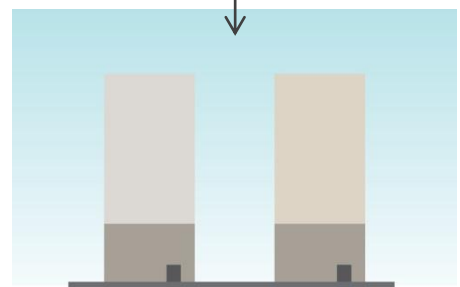
緑を背景とする場所に極端に明るい色や暗い色の建物は目立ちます。



空を背景とする場所に極端に暗い色の建物は目立ちます。



YR（黄赤）やY（黄）系の落ち着いた色を使用することで自然環境と調和します。

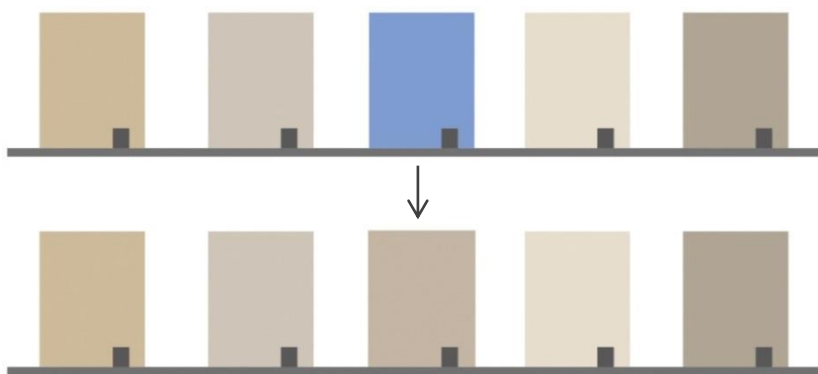


明るい色の建物は空と調和します。

（2）周辺建物との調和

①周辺建物の色との調和

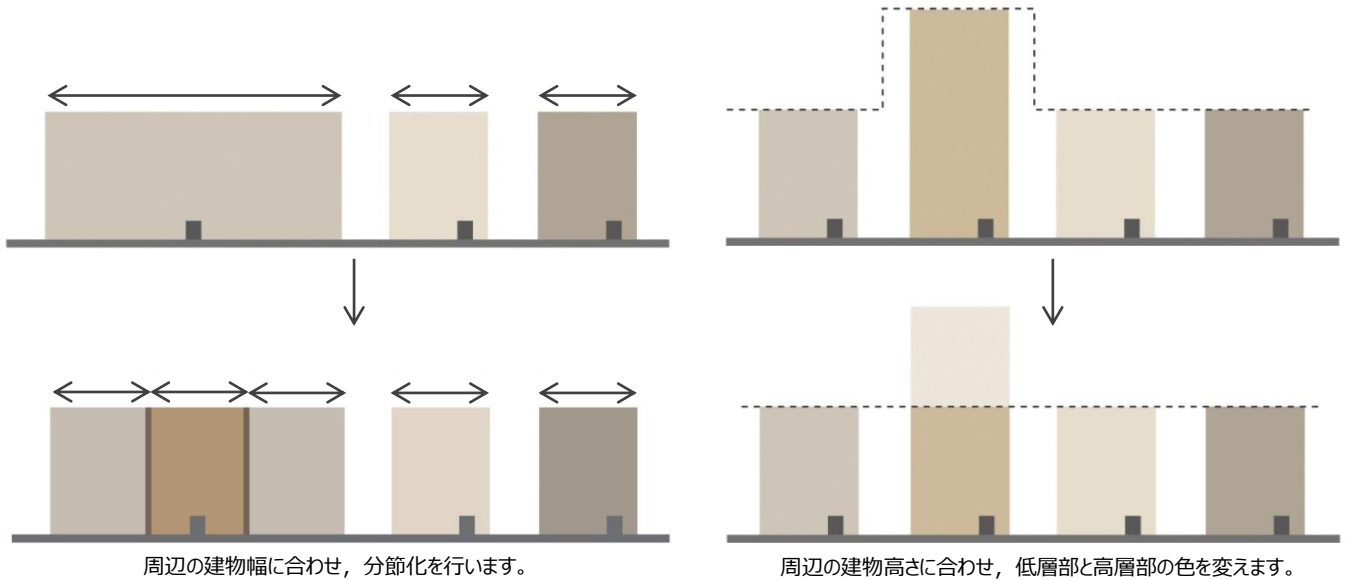
周辺建物との調和を考え、色を選択しましょう。周辺から突出した色は周りの景観から浮いた印象となってしまいます。



建物単体で、色彩計画を行うのではなく、周辺との調和を考えながら計画を行いましょう。

②建物の分節化

長い壁面をもつ建物や周辺の建物より高い建物は、周辺の建物から突出し目立ってしまいます。周辺の建物幅に合わせアクセント色などにより壁面を分節したり、周辺の建物高さに合わせて建物高層部と低層部で色を切り替えたりすることで、周辺の建物規模に調和させましょう。



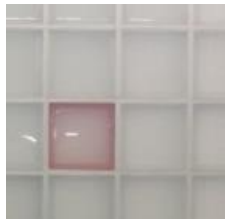
◆コラム

●新しい素材

近年、コンクリート打放しや、ガラス、金属などを外壁仕上げに使用する建物も増えています。素材の工夫次第で様々な表情を出すことが可能です。



コンクリート打放し



ガラスブロック



金属



アクリルパネル



コンクリート打放しの施設



金属素材を使用している駅舎



アクリルパネルを使用している集合住宅

5 色彩を活用した身近な景観づくり

市内には、立地環境、市街地の形成時期、基盤整備の状況などから、地区ごとに多様な景観が形成されており、それぞれの建物などが地区の景観のベース（地模様）となっています。これら地模様をつくる建物は、景観づくりにおいて重要な要素です。

また、良好な景観は、建物の色だけで決まるものではなく、周辺環境との関係によるところが大きく、調和のとれた美しい街並みとするためには、周辺環境との関係性を読み解くことが大切です。色で個の主張を競い合うのではなく、生活にうるおいとやすらぎをもたらす草花などの色や四季の変化が引き立つような自然環境を生き生きと見せる景観づくりに努めましょう。

ここでは、色彩を活用した身近な景観づくりにおけるポイントを4つの事項に整理しました。



（1）周辺環境を観察しよう

周辺環境との調和のとれた景観づくりを実践するために、まずは身近な周辺環境を観察することから始めましょう。大小の川の流れや国分寺崖線による地形変化、駅周辺や沿道などの都市空間、のどかな農の風景など、建物の立地環境の違いが景観づくりに大きな影響を与えます。そのため、周辺環境がどのようになっているかを正確に把握することが景観づくりにおいても重要となります。

ポイント

- 少し離れた位置から周辺環境をぐるりと眺めてみよう。
- 建物以外の色彩要素にも目を向けてみよう。
- どんな立地環境にあるかを考えてみよう。

※調布市景観計画の第11章「協働による身近な景観まちづくり」では、小学校区別の景観まちづくりの方針（案）を示しており、各地区ごとの主な「景観資源」について紹介しているので、参考にしてください。



調布市景観計画で紹介している景観資源の例

(2) 周辺の街並みの特徴をとらえよう

2つ以上の建物が並びと街並みになるといわれます。両隣との調和を図り、街並みを常に意識することが大切です。向う三軒両隣の建物が、どんな色をしているか、どんな素材を用いているのか、敷地際のしつらえはどうなっているのか、緑は多いかなどを観察し、街並みの特徴を感じ取りましょう。

ポイント

- 周辺の建物の外壁や屋根の色を観察することで、街並みの特徴を感じよう。
- 向こう三軒両隣を、ひとつの街並みとして考えよう。
- どのような建物の色が街並みと調和するかを考えよう。



建物と緑が調和した落ち着いた街並み

(3) 自然の色を先入観でとらえない

崖線や社寺林などの緑、多摩川や野川などの水辺など、自然環境を身近に感じることでできる調布市では、建物の色と自然環境との調和を考える方も多いと思います。そのとき、樹木の色＝緑色、川の色＝水色といった自然環境の色を先入観でとらえないよう気を付ける必要があります。自然の色は、私たちが考えているよりも落ち着いた色となっています。

ポイント

- 樹木の色＝緑色、川の色＝水色といった先入観で色をとらえないよう気を付けよう。
- 自然の色は、考えているよりも落ち着いた色であることを意識しよう。
- 緑色や青色のように色味を感じやすい色は、自然環境の中では調和しにくいことを知ろう。



どちらが周辺と調和しているように感じますか？背景が緑の時は、落ち着いた色の方が調和しやすくなります。

（４）自然環境に調和しやすい色を外壁の基本となる色として考えよう

調布には、どんな色の建物がふさわしいでしょうか。街を歩いているときに、赤色、黄色、青色など、周辺から突出した色の建物を見かけると、その色は、本当にイメージ通りの色だったのかと疑問をもつことがあります。無限にある色の中から、イメージ通りの色を選ぶことは専門家でも苦労することがあります。

国分寺崖線や多摩川、野川など自然環境を身近に感じることのできる調布市においては、自然環境と調和しやすいYR（黄赤）やY（黄）系の色を基本に考えると失敗の少ない色彩計画となります。YR（黄赤）やY（黄）系の色の中にもたくさん色がありますので、十分に個性を発揮できる色彩計画が可能です。その際に、面積効果などの色の特性なども踏まえ、色彩計画をすることが失敗をしないポイントとなります。

ポイント

- 自然環境と調和しやすいYR（黄赤）やY（黄）系の色を基本に考えると失敗の少ない色彩計画となります。
- 建物の色に迷ったら、第4章「景観計画における色彩基準と推奨色」で紹介する推奨色などを参考としてください。



YR（黄赤）やY（黄）系を外壁の基本となる色とした、落ち着いた住宅地や集合住宅

◆コラム

●屋根の色

国分寺崖線の崖上や建物の上階から街を見下ろすと、住宅の屋根がよく見えます。赤や青の屋根は誘目性が高く、景観としてのまとまりを壊してしまうこともあります。屋根の色については、推奨色を設定していませんが、調和について意識しましょう。

